ランス美術館コレクション

風景画のはじまり

コローから印象派へ

2021年11月20日（土）－2022年1月23日（日）

クロード・モネ《ベリールの岩礁》 1886年　油彩／カンヴァス　Inv. 907.19.191 ランス美術館　© MBA Reims 2019/Photo : C.Devleeschauwer

コロー、クールベ、ブーダン、モネ、ルノワール…百花繚乱の時代

【プレスリリースのお問い合わせ】　展覧会担当：深尾・山本　　広報担当：大庭・岡田

静岡市美術館　〒420－0852 静岡市葵区紺屋町17－1葵タワー3F

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART　tel. 054-273-1515（代表） fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

フランスの古都ランスから珠玉のコレクションが来日。

歴代国王の戴冠式が行われた大聖堂で知られるフランス北東部の都市、ランス。街の中心に立つランス美術館には、世界屈指の風景画コレクションが収蔵されています。

フランスで風景画が隆盛を極めた 19 世紀、官立の美術アカデミーでは風景画のコンクールが開催され、このジャンルに特化した指南書が相ついで刊行されました。またチューブ入り絵の具の開発と鉄道網の発達が戸外制作の流行をもたらし、ありのままの自然を描く前衛画家たちの登場を促すことになります。

本展ではランス美術館のコレクションを筆頭に、約 70 点の出品作を通して、新古典主義からバルビゾン派、そして印象派に至る近代風景画の展開をひも解きます。アシル＝エトナ・ミシャロン（1796–1822）、カミーユ・コロー（1796 –1875）、ギュスターヴ・クールベ（1819–1877）、シャルル＝フランソワ・ドービニー（1817–1878）、ウジェーヌ・ブーダン（1824–1898）、クロード・モネ（1840–1926）、カミーユ・ピサロ（1830–1903）など、19 世紀の巨匠たちによる名品が集結。なかでも 16 点の油彩画が一堂に会するコローの展示は必見です。ランス美術館がリニューアル休館中の今だからこそ実現できたこの機会に、ぜひご覧ください。

ランス美術館

ランス市が美術品の収集を始めるのは 1790 年代初頭のことです。当初は市庁舎の一角で作品を保管していましたが、1913 年、サン＝ドニ修道院の遺構を改築して現在の場所に美術館を開設。地元の人々からの寄贈等によって増え続けた所蔵品は今日 5 万点を超え、16 世紀から 21 世紀までを網羅しています。コレクションの拡大に伴い、2016 年に美術館の大規模改修を決定、現在は 2023 年（予定）の再開に向け休館中です。

静岡市美術館では 2016 年に「ランス美術館展」を開催し、同館が所蔵するドラクロワ、クールベ、コロー、フジタらの作品により、17 世紀から 20 世紀に至るフランス美術の流れをたどりました。ランス美術館の協力による 2 回目の展覧会である今回は、19 世紀の風景画史に光を当て、新たな角度からその所蔵品の魅力に迫ります。

開催概要

■ 会期：2021 年 11 月 20 日（土）– 2022 年 1 月 23 日（日）

■ 休館日：毎週月曜日、年末年始［12 月 27 日（月）–1 月 1 日（土・祝）］
※ただし 1 月 3 日（月）・1 月 10 日（月・祝）は開館、1 月 4 日（火）・1 月 11 日（火）は休館

■ 開館時間：10:00－19:00（展示室入場は閉館の 30 分前まで）

■ 観覧料：一般　1,300（1,100）円、大高生・70 歳以上　900（700）円　、中学生以下無料
＊（　）内は前売および当日に限り 20 名以上の団体料金
＊障がい者手帳等をご持参の方および介助者原則 1 名は無料

■ 前売券：10 月 9 日（土）から 11 月 19 日（金）まで販売

■ 当館ホームページ（www.shizubi.jp）より日時指定予約ができます。
詳細は HP をご覧ください。

■主催等

主催：静岡市、静岡市美術館　指定管理者（公財）静岡市文化振興財団、テレビ静岡、中日新聞東海本社

後援：静岡市教育委員会、静岡県教育委員会、在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

協力：日本航空

企画・監修：ランス美術館　Exposition produite et gérée par le Musée des Beaux-Arts de la VILLE DE REIMS EN FRANCE.

企画協力：ブレーントラスト

特別協賛：セキスイハイム東海

展覧会のみどころ

1 . コローの作品、16 点が来日

詩情を湛えた風景画で今なお高い人気を誇るコロー。官展向けの大画面作品をアトリエで手掛ける一方で、戸外での自然観察も積極的に行い、印象派の実践を先取りしました。ランス美術館はルーヴル美術館に次ぐ規模といわれる 27 点ものコロー作品を所蔵、本展はそのうちの 16 点がまとまって来日する貴重な機会です。

2 . フランス風景画の名品が集結

19 世紀を代表する名画が一堂に会します。戸外制作ブームの口火を切った新古典主義の画家たち、銀灰色の叙情的な風景画で名高いコロー、フォンテーヌブローの田園風景を描いたバルビゾン派、光あふれる海景画で人気を博したブーダン、微細なタッチで自然の移ろいを活写した印象派など、画家たちの眼差しの軌跡にご注目ください。

3 . 19 世紀の風景画制作を伝える資料も展示

当時の制作方法を知ることができる書籍や画材を紹介。なかでも本展に出品されるヴァランシエンヌの『芸術家のための実用遠近法入門および画学生とくに風景画をめざす学生のための省察と忠告』（1800 年、パリ）は印象派世代にも広く読まれたことが知られ、非常に貴重な資料です。あわせて日本ではなかなか見ることのできない 19 世紀の絵具箱も展示します。

ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー《岸辺の小舟に乗る漁師》 1860-65 年　油彩／カンヴァス　Inv. 899.16.30 © MBA Reims 2019 / Photo: C.Devleeschauwer

第 1 章　コローと 19 世紀風景画の先駆者たち

近代風景画の起源は、19 世紀初頭の新古典主義にまでさかのぼることができます。美術アカデミーの遠近法教授を務め、新古典主義の画家であったヴァランシエンヌは、画学生に向けて刊行した 1800 年の指南書 * の中で、風景画制作における自然観察の重要性を説きました。その教えに従い、弟子のミシャロンやベルタンはアトリエで大画面作品に着手する前に野外スケッチを実践。さらに現実の光景から理想的な情景を創り出す彼らの手法は、コローへと引き継がれ、実景に基づく叙情的風景を表した「思い出」シリーズに結実します。一方、クールベは手つかずの自然を荒々しいタッチで描き、写実主義を極限まで推し進めました。

* ピエール＝アンリ・ド・ヴァランシエンヌ『芸術家のための実用遠近法入門および画学生とくに風景画をめざす学生のための省察と忠告』(1800 年、パリ)

コローを指導した新古典主義の申し子
ジャン＝ヴィクトール・ベルタン

ジャン＝ヴィクトール・ベルタン《風景》 1820 年
油彩／カンヴァス　国立造形センター（文化省）より寄託（1901 年）
Inv. D. 901.1.1

最初の風景画コンクールで優勝した
アシル＝エトナ・ミシャロン

アシル＝エトナ・ミシャロン《水車小屋のある風景》 1814-16 年
油彩／カンヴァスに裏打ちされた紙　Inv. 2000.3.1

写実主義の旗手
ギュスターヴ・クールベ

ギュスターヴ・クールベ《レマン湖の岸辺（急流）》 1875 年頃
油彩／カンヴァス　Inv. 907.19.73

すべてランス美術館　© MBA Reims 2019 / Photo: C.Devleeschauwer

カミーユ・コローの油彩画、16点まとめて展示！

カミーユ・コローは新古典主義の流れをくみつつ、印象派へと続く近代風景画の基礎を築いた画家です。初期にはミシャロンとベルタンに師事し、3度にわたりイタリアに滞在、ローマやその近郊で描きためたスケッチをもとに官展に出品するための大画面作品を手掛けました。フランス国内でも各地の田園風景を描き、とくに別荘のあったヴィル＝ダヴレーはコローの重要な霊感源になりました。その交友関係は広く、フォンテーヌブローの森でバルビゾン派と親交を結び、若き日のピサロを指導したことが知られています。本展ではイタリア時代の初期作品2点を含む、16点をご覧いただけます。画家自身の記憶から紡がれた詩情豊かな風景画にぜひご注目ください。

ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー
《湖畔の木々の下のふたりの姉妹》 1865-70年
油彩／カンヴァス　Inv. 887.3.82

初期作品

ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー
《ヴィラ・メディチの噴水盤》1825-28年頃、1845年以降に加筆
油彩／カンヴァス　Inv. 928.13.4

ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー
《イタリアのダンス》 1865-70年
油彩／カンヴァス　Inv. 887.3.1

思い出シリーズ

ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー
《アルバーノ湖の思い出》 1865-70年
油彩／カンヴァス　Inv. 887.3.51

すべてランス美術館　© MBA Reims 2019 / Photo: C.Devleeschauwer

第２章　バルビゾン派

19 世紀前半、パリ南東のフォンテーヌブローの森に隣接するバルビゾン村は、風景画制作の一大拠点と化しました。テオドール・ルソー、ドービニー、デュプレ、トロワイヨン、シャルル・ジャックをはじめとして、この地で精力的に活動した画家たちは、今日バルビゾン派と呼ばれています。聖書・神話主題が重視された時代にあって、バルビゾン派の画家たちは田園での労働や動物との共生、何気ない日々の光景を捉えました。彼らは実地での風景観察を重んじ、例えばドービニーは船の中にアトリエをしつらえ、川の上で制作に励んだといいます。

アトリエ船から川の光景を写し取った シャルル＝フランソワ・ドービニー

シャルル＝フランソワ・ドービニー
《風景、雨模様の空》 1865 年
油彩／板　Inv. 907.19.79

「田園と樹のミケランジェロ」と讃えられた アンリ＝ジョゼフ・アルピニー

アンリ＝ジョゼフ・アルピニー《晴天のサン＝プリヴェ》 1886 年
油彩／カンヴァス　Inv. 907.19.129

「羊のラファエロ」の異名をもつ シャルル・ジャック

シャルル・ジャック《放牧地の羊の群れ》
1873 年　油彩／カンヴァス　Inv. 887.3.65

すべてランス美術館　© MBA Reims 2019 / Photo: C.Devleeschauwer

第 3 章　画家＝版画家の誕生

古くは複製技術とみなされた版画ですが、19 世紀には芸術表現のためにこれを用いる「画家＝版画家」が頭角を現すようになります。なかでもバルビゾン派世代の画家たちは、銅板を化学薬品で腐食して製版するエッチングと、写真技術から派生したクリシェ＝ヴェールを得意とし、芸術性の高い風景版画を数多く制作しました。またこの時期には、風景のみならず風景画家も版画の主題として注目され、本展出品作の『田園の風景画家』（1866 年初版、76 年再版）では、挿絵版画と文章によって戸外制作に勤しむ画家たちの様子が表されています。

版画制作にも勤しんだ ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー

ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー
《物思いにふける人（夕暮れ）》　1854 年
クリシェ・ヴェール（ガラス版印刷）／紙　個人蔵

クリシェ・ヴェール…19 世紀に写真技術とともに発明された版画技法。ガラス版の表面を被膜でコーティングして光を通過させないようにし、針などでひっかいて絵柄を描く。ひっかいた箇所はガラス面が露出するので、上から光を当てると、この部分だけ光が通過し、下に敷いた印画紙に絵柄を焼き付けることができる。*

動物画家として人気を博した ジャン＝フェルディナン・シェニョー

ジャン＝フェルディナン・シェニョー
《平原の羊の群れ》　エッチング／紙　個人蔵

エッチング…16 世紀から用いられた版画技法。銅版や亜鉛版に耐酸性の防蝕剤を塗り、その上から針でひっかいて絵柄を描く。これを腐蝕液につけると、銅板が露出した絵柄の部分だけ腐蝕によって線状のくぼみができ、そのくぼみにインクを詰めてプレス機にかける。*

風景画家たちの姿を版画に表した アドルフ・ポルティエ

アドルフ・ポルティエ
《風景画家たち（レオン・ロワールに基づく）》
『田園の風景画家』　1876 年
エッチング／紙　個人蔵

* 版画技法については以下を参照。
『版画の技法と表現』町田市立国際版画美術館、1989 年（初版は 1987 年）

第４章　ウジェーヌ・ブーダン

ブーダンは戸外制作の発展に大きく貢献した画家のひとりです。ノルマンディー地方のオンフルールで水夫の子として生まれ、文房具店を経営する傍ら趣味でデッサンを始めました。その後本格的に絵画を学び、ノルマンディー地方の沿岸風景を繰り返し描くようになります。光と大気の描写を得意としたブーダンは、コローから「空の王者」と賞賛されました。またル・アーヴルでモネに戸外制作を教え、自身も1874年の第一回印象派展に出品するなど、印象派の誕生にも寄与しました。

ウジェーヌ・ブーダン《水飲み場の牛の群れ》 1880-95 年
油彩／カンヴァス　Inv. 907.19.33

ノルマンディーの海

ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィルの浜辺》
油彩／カンヴァス　Inv. 949.1.68

光と大気の機微を捉えた「空の王者」、ウジェーヌ・ブーダン

ウジェーヌ・ブーダン《ベルク、出航》 1890 年　油彩／カンヴァス　Inv. 907.19.34

すべてランス美術館　© MBA Reims 2019 / Photo: C.Devleeschauwer

第５章　印象主義の展開

1874 年、モネ、ルノワール、ピサロ、シスレーをはじめとする新進気鋭の画家たちは、保守的な官展に対抗すべくグループ展を開催。後に「印象派展」と呼ばれることになるこの展覧会は、メンバーの入れ替わりを繰り返しながら、1886 年まで全８回にわたり開催されました。印象派の画家たちが目指したのは、純色の小さなタッチを並べる筆触分割の手法により、色とりどりに移ろいゆく自然を活写すること。即興性が際立つ彼らの作品は当初スケッチのようだと批判されましたが、画商たちの協力もあって次第に人気を博すようになります。時代が下るにつれて作風や制作方法は多様化し、画家たちは各々に個性を開花させていきました。

無垢な眼になることを望んだクロード・モネ

クロード・モネ《ベリールの岩礁》 1886 年
油彩／カンヴァス　Inv. 907.19.191

実は風景画も描いたピエール＝オーギュスト・ルノワール

ピエール＝オーギュスト・ルノワール《ノルマンディーの海景》
油彩／カンヴァス　Inv. 978.10.141

グループをまとめた長老カミーユ・ピサロ

カミーユ・ピサロ《ルーヴル美術館》 1902 年
油彩／カンヴァス　Inv. 907.19.208

最晩年の作

すべてランス美術館　© MBA Reims 2019 / Photo: C.Devleeschauwer

関連事業

1．講演会「風景画の誕生とランス美術館」

日時：2021 年 12 月 5 日（日）
14：00–15：30（開場　13：30）
講師：深谷 克典 氏（名古屋市美術館参与）
会場：当館多目的室
参加料：無料　　定員：50 名（予定）
申込締切：11 月 18 日（木）必着
※申込方法の詳細は当館ホームページをご覧ください。

2．講演会②「印象派による戸外制作の意味 ～ヴァランシエンヌから、コロー、印象派へ～」

日時：2021 年 12 月 12 日（日）
14：00–15：30（開場　13：30）
講師：古谷 可由 氏（公益財団法人ひろしま美術館学芸部長）
会場：当館多目的室
参加料：無料　　定員：50 名（予定）
申込締切：11 月 25 日（木）必着
※申込方法の詳細は当館ホームページをご覧ください。

3．当館学芸員によるスライドトーク

日時：2021 年 12 月 26 日（日）、2022 年 1 月 15 日（土）
いずれも 14：00–（40 分程度）
会場：当館多目的室
参加料：無料　定員：各回 50 名（予定）
※当日 10 時より整理券を配布、定員になり次第配布終了。

静岡・音楽館×科学館×美術館 共同事業　静岡　室内楽フェスティバル2021

4．ミュージアム・コンサート「ドビュッシーとラヴェル」

日時：2021 年 11 月 28 日（日）15:00 開演（開場：14:30 開場）
会場：当館多目的室
参加料：1,000 円（全自由・チケット制）
※10 月 23 日（土）10 時より当館受付にて販売。
※定員になり次第販売終了。
定員：50 名（予定）
出演：湯原 好恵 氏（ヴァイオリン）、新井 瞭 氏（ピアノ）
曲目：C. ドビュッシー：ヴァイオリン・ソナタ
M. ラヴェル：ヴァイオリン・ソナタ　ほか
主催：静岡市美術館
協力：静岡音楽館 AOI

アクセス

電　車　JR 静岡駅北口より地下道を利用して徒歩 3 分
静岡鉄道新静岡駅より徒歩 5 分

新幹線　東京駅・名古屋駅から東海道新幹線ひかり号で約 1 時間
新大阪駅から東海道新幹線ひかり号で約 2 時間

車　東名静岡 IC より約 15 分
※お車でお越しの際は、近隣の駐車場をご利用ください。

空　路　富士山静岡空港より静鉄バス
（静岡エアポートライナー）で約 1 時間